

# 復活から再臨へ

シリーズ～終末を生きる～

2018/4/8

# 使徒言行録 1章 3～11節

イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。

さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

# 復活後のイエス様

- 「御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し」
  - 「婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。」マタイ28:9
  - 「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。」ヨハネ21:13
- 「四十日にわたって彼らに現れ」
  - 閉ざされた部屋で・湖畔で・歩いているときに…
- 「神の国について話された」
  - 復活される前と同じように

# 弟子たちの誤解

さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。

- 弟子たちはイエス様の死と復活を目撃しながら、イエス様の目的を理解しなかった!
  - 弟子の誰か一人ではなく、みながそう思っていた
- 私たちはイエス様を自分の目的のために利用しようとしてしまう
  - キリスト教は「御利益信仰」ではない!!!!
  - 私たちは既に最高の御利益を頂いている

# 弟子たちに与えられた使命

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、**わたしの証人となる。**

- 聖霊が力を与えて下さる
  - 弟子たちの考えを作り変え、地の果てまで導く
  - 聖霊は神様の仕事を実行するときに降る
- イエス様の(復活の)証人となる
  - 「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。」使徒2:32

# 天に帰られたイエス様

こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。

- 弟子たちはイエス様の昇天を目撃した
  - イエス様は間違いなく地上を去られた
  - 弟子たちは信じられない思いだっただろう
- なぜこのような別れをされたのだろうか？
  - 地上での役目が完了したことを示すため
  - イエス様に依存する弟子たちの気持ちを断ち切るために

# 再臨の約束

「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

- 御使いは、イエス様が「またおいでになる」と約束した
  - イエス様のいない時はやがて終わる
  - 弟子たちは「その時までがんばろう!」と思った
- イエス様御自身も約束しておられた
  - 「そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。」マタイ24:30



# 再臨を待ち望んだ弟子たち

- “パルーシア”（ギリシヤ語“凱旋”）
  - パウロ:「主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。」テサー5:23
  - ヤコブ:「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。…主が来られる時が迫っているからです。」ヤコブ5:7
  - ヨハネ:「子たちよ、御子の内にいつもとどまりなさい。そうすれば、…御子が来られるとき、御前で恥じ入るようなことがありません。」ヨハネー2:28
- “マラナ・タ”（アラム語）
  - 「マラナ・タ(主よ、来てください)。」コリー16:22
  - 初代教会のあいさつだった!

# 再臨を待ち望んだ弟子たち

- “パルメシア”（ギリシヤ語“凱旋”）
  - パウロ：「あれから2000年経ちました！  
ろのないものとしてくださいますように。」テサー5:23
  - ヤコブ：「弟子たち（クリスチャン）の使命は  
…主が来られる時が迫っているからです。」ヤコブ5:7
  - ヨハネ：「子たち、まだ終わっていません  
うすれば、…御子が来られるとき、御前で恥じ入るような  
ことがありません。」ヨハネ2:28
- “マラナ・タ”（アラム語）
  - 「マラナ・タ（主よ、来てください）」コリー16:22
  - 初代教会のあいさつだった！

## 復活を解く鍵

～「エマオ途上の顕現」から～

＜由木 康＞

それでは、この物語の中心点はどこにあるのでしょうか。いうまでもなく、道で出会った見知らぬ人が、ふたりの弟子の願いを聞いて、エマオの旅舎にはいり、そこでパンをさき、祝福を与えたとき、ふたりの目が開けて、その人がイエスであることがわかったというあのくだりです。つまり、ふたりの弟子たちは、見知らぬ人と食事を共にしたとき、復活の主の「顕現」を実感したのです。ここに大多数の復活物語を解く手があります。

新約聖書に記された復活物語を通観して気づくことは、復活の主が一般人ではなく信者である弟子たちに、それもたいて二、三人以上の集団に現れた出来事であったというこ

とです。言い換えるならば、復活は、弟子たちが二、三人以上集まり、共に交わっている場所に最もしばしば現れた信仰的、集団的な体験であったということでもあります。

ここにおいて私たちはイエスが生前に語られた一つの言葉を思い起こします。それはマタイ福音書18章20節のあの有名な言葉です。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

ここで「その中にいる」という句は、「弟子たちの心の中にいる」という意味に解されがちですが、実は「弟子たちの間に、その交わりの中にいる」という意味です。つまり、二、三人またはそれ以上の人イエスの名によって集まり、心を合せている所には、イエス自身もそこにおいでになるということです。これはイエスが生前に言われた言葉ですが、復活後、昇天に際しても同じことを言われました。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28:20)

この言葉のうちに復活を解く少なくとも一つの鍵が見出されます。イエスの在世中、弟子たちは主を中心とする人格的な交わりのうちに生きていました。時には主の福音の宣教に耳を傾け、時には主の力あるわざをまのあたりに見、また時には、主と食事を共にして来るべき神の国がすでに始まっていることを経験しました。特に、イエスが五千人の人々にパンを分けられた光景や、最後の晩餐のとき、パンとぶどう酒とを祝福された姿などは、永久に忘れがたいものでした。

(中略) 復活は今もなお教会の中で繰り返される信仰体験です。私たちが主の名によって集まり、神をあがめ、祈りに心を合せるとき、生けるキリストはそこに親しくお臨みになります。昔、エマオ途上の弟子たちにお臨みになったように。